

令和 3 年度 亀田東児童館事業実施報告書

1 実施した事業

2 自己評価

3 課題と対応

1 健全な遊びを通じた児童の集団及び個別指導

① つくってみよう！（創作活動室）

（自己評価）

今年度も昨年度と同様、毎月1つずつ工作を準備し、来館時にいつでも自由に製作が楽しめるよう、簡単な工作を常時提供した。創作活動室に全ての材料を準備し、作りたい人が作りたい時に製作出来るように環境を整えた。今年度は、子ども達がそれぞれ作り方を「見て・読んで・理解する」ことに力を入れ、作り方に写真を載せる等の工夫を行った。それにより、以前より「どうやるの?」「出来ない」の声が少なくなった印象を受けている。この「つくってみよう!」の開催方法も利用者間で定着し、先に製作をした子が他の子に作り方を教えてあげる等、子ども同士で教え合う姿も頻繁に見られた。初めは作り方の説明を全く見ずに「どうやるの?」と聞いてきていた子ども達が自力で製作している姿の多さから、「見て・読んで・理解する」ことが身に着いてきたことを嬉しく思う。

また、1月21日～3月6日までの新潟県のまん延防止等重点措置適用による休館期間においてはひなまつりにちなんだ「おひなさま」の工作キットを限定40個準備し、配布を行った。1人1つ自由に児童館まで取りに来てもらい、自宅で楽しんでもらった。コロナ禍で制限の多い生活の中、親子がどう過ごしているのか様子を知ることが出来たり、親子の気分転換の機会にもなったことと思う。

「つくってみよう!」は遊べる工作であり、製作を楽しんだ後の遊び方は何通りもある。「こんな遊び方もあるよ」と職員がアドバイスするだけでなく、保護者や子ども達の発想の豊かさは素晴らしい。特に高学年の遊び方を見ていると、楽しみ方が倍増している。今後も子ども達の楽しんでる様子をヒントに、提供内容や遊びを膨らませていきたいと思う。

（課題と対応）

毎月1つずつの工作提供が定着し、「今月は何作るの～?」と楽しみにしている声もよく聞かれるようになり、来館した子ども達のほとんどが参加してくれる「楽しみなイベント」として定着してきている。「つくってみよう!」は工作のイベントではあるが、「作る」以外にも「読む力」「理解する力」「友達に説明する力」等の様々なことが身に着くことを日々実感している。今後も、季節感を味わえたり、遊び方を考えたり、創造力を育んだり、友達との関わり等、子ども達の成長に役立つ活動を考えていきたい。また、今後さらに休館措置が行われたとしても、児童館の機能を全て止めるのではなく、一部でも提供出来る工夫を続けて考えていきたい。

② 遊戯室で遊ぼう！（遊戯室）

(4/26、5/24、6/28、7/29、8/23、10/11、11/11、12/27、3/28)

(自己評価)

今年度も新型コロナウイルスの感染対策のため、開始前と終了後の手洗い・消毒、マスクの着用、遊戯室の換気を徹底し、三密を避けるように内容を工夫して集団遊びを提供した。普段子ども達が遊戯室で遊んでいるのはドッジボールやサッカーが多いため、一味違った「じゃんけんゲーム」や「ピンポン玉リレー」、「ハンカチ落とし」等の遊びを提供してきた。隣接する亀田東ひまわりクラブ第一の子ども達も多くするイベントであるが、感染症拡大防止のため、ひまわりクラブの子ども達は運動等の体を動かすことが出来ない意向もあり、毎回激しい運動にはせず、感染対策を行いながら無理なく楽しめるよう内容や人数設定などに考慮することを努めた。ひまわりクラブの支援員の方々との打ち合わせや共通認識が活発に行われ、より良い内容提供に繋がったと思う。コロナ禍で遊びがマンネリ化している中で、子ども達に新鮮で新しい遊びを多く提供することが出来たと思う。分かりやすいルールで大勢で楽しむことの出来る遊びを、学年・性別問わずに、皆で楽しむ笑い声に児童館が活気付いた。

(課題と評価)

毎月1回、平日の放課後15時30分～開催しているが、主な参加者はひまわりクラブの1～2年生であり、長期休暇、早下校の日でない限り児童館利用者の参加はほぼない。児童館利用者は下校後、自宅から来館するため、なかなかこの開催時間には参加しづらいことが主な理由として挙げられる。また、児童館利用やひまわりクラブの子ども達の様子を見ていると、身体を動かすことが大好きであることは勿論だが、決められた遊びを提供されるよりも、ドッジボールやサッカー、バドミントン等、それぞれの好きな遊びを思いっきり楽しむことを求めているようにも感じられる。今後は、ひまわりクラブの意向も聞きながら、開催時間や内容等を見直す必要がある。

今後もコロナの安全対策をしっかりとしながら、身体を動かすことが大好きな子ども達の欲求を満たすことの出来る遊びのより良い提供の方法を模索していきたい。

③ シアター（遊戯室）

(5/2、8/3、1/7)

(自己評価)

今年度も子ども達の長期休みの間と大型連休中に一度ずつ行った。幼児から小学生に加えて、隣接するひまわりクラブ第一の子どもたちも多く参加し、みんなで鑑賞を楽しんだ。感動して涙を流したり、怖い場面では身体をすくめたり、大笑いしたりと、映画の世界に夢中になって入り込んでいる姿が印象的だった。家で観るテレビとは違い、友達同士と一緒に大きなスクリーンで観るのも新鮮だったと思う。長期休みの特別感を味わう事が出来ていた。

シアターの日は別に、オリンピックや高校野球、高校サッカー、アルビレックス新潟の試合のテレビ中継がある日には、子ども達からの要望もあり、鑑賞室のテレビで観戦を行った。学年を超えて友達同士で盛り上がりながら、手に汗握って応援している姿は印象的だった。自宅で見ているとすぐに飽きてしまうと言う子も、児童館ではのめり込むように楽しんでいた。児童館ならではの一体感を味わえたと思う。

(課題と対応)

今後も子ども達の興味関心をリサーチしながら、子ども達の楽しみの1つとなれば良いと考えている。長期休みの時やそれ以外でも、ひまわりクラブや親子さん、中高生と来年度も相談しながら、テレビとスクリーンをそれぞれ活用しながら臨機応変に行うようにしていきたい。

④ アトリエじどうかん (創作活動室)

(4/5、5/10、6/7、7/5、8/16、10/25、11/1、12/6、1/6、3/22)

(自己評価)

ぬり絵が大好きな低学年とひまわりクラブ第一の子ども達の参加が目立った。初めて「水性色鉛筆」に触れ、鉛筆なのに水を付けて描くと絵の具のように色が広がる様子に感動していた。水性色鉛筆の他にも水で薄めたコーヒーや白い修正ペン等も使い、普段とは違うぬり絵を毎回楽しみにしている子ども達も多かった。同じ絵でも子ども達の色使いで雰囲気ガラリと変わり、個性的な作品が多く完成していた。また、長期休みや早下校の日には、普段は下校時間が間に合わず、なかなか参加出来ない高学年の女子が参加し、水性色鉛筆の魅力に惹かれていた。

(課題と対応)

興味のある小学生が増え、ひまわりクラブ第一の子ども達も加えて毎回多くの子ども達が参加してくれている。それぞれが高い集中力で取組み、時間設定は30分であるが、毎回約1時間かけて丁寧に色を塗っている。今後も子ども達の反応を見ながら、中井先生と協議を重ね、小学生や幼児親子さんの興味を引くような内容や開催方法を検討し、充実させていきたい。また、高学年や幼児さんも参加しやすく興味を持ってもらえるように、長期休み等に普段のぬり絵とは異なる特別版として中井先生協力のもと、水性色鉛筆やアクリル絵の具、亀田縞などを使用した製作イベントを企画していきたい。

⑤ サッカー教室・サッカー大会 (遊戯室)

(4/7、4/21、5/19、6/2、6/16、7/7、7/21、8/4、8/18、10/6、10/20、11/17、12/1、12/8、12/15、1/5、3/16、3/30)

(自己評価)

地域のサッカークラブの監督を招いて、毎月第1・3水曜日の15時半～1時間開催しているサッカー教室。昨年度から引き続き、小学1～5年生の間で毎回大人気のイベントとなっている。参加する子ども達の顔ぶれも固定されてきており、安定の楽しさである上に、自らコーンやゴール等の道具の準備を手伝ったり、チーム分けもスムーズに行えるようになってきている。監督が個々のレベルを把握してくれているため、試合となると白熱した試合展開を見せてくれる。ベンチで待機しているメンバーも他チームの試合を見ながら研究し、ますますサッカー熱が高まっていることを感じる。サッカーの技術の向上は勿論だが、精神面での成長や、社会性を身に付ける場として、今後も大勢の子ども達と一緒に楽しんでもいきたいと思う。

今年度のサッカー大会は、サッカー教室の参加者限定で開催した。参加者の大半は2・3年生の低学年であったため、5・6年生には大会の進行役と各チームのコーチ役を任せた。高学年のコーチ達は、的確なアドバイスで真剣にコーチングをしており、大活

躍っていた。普段のサッカー教室や大会では見られない高学年の姿、そして子ども達の熱気あふれるプレーは素晴らしかった。最後は高学年チーム対低学年チームの試合を行ったが、どのチームも高学年から点数を奪う事が出来なかった。この悔しい思いが、さらなる練習、大会への意欲になっていることと思う。2回目のサッカー大会での高学年との対戦では、全チームが点数を奪うことができ、大きな歓声が上がっていた。

(課題と対応)

参加する小学生の顔ぶれがかなり固定してきているため、新1年生など誰でも参加しやすい雰囲気作りを行い、さらに活気づけていきたい。

また、サッカー教室の参加者の大半が男子であるため、来年度は女子も参加しやすく、女子の関心度の高い「ダンス教室」の開催を検討している。

⑥ その他各種イベント

- ・アニバーサリーまつり (4/18) ・なっちゃんダンス (5/15)
- ・ドッジボールで遊ぼう (6/20) ・たのしく歌おう 七夕の集い (7/2)
- ・七夕お楽しみ会 (7/4) ・GOGOスタディー (7/26、27)
- ・ひまわりクラブ合同防犯教室 (7/29) ・夏休みお楽しみ企画お笑いライブ (7/30)
- ・夏休み工作 スライム (8/2) ・親子でエンジョイ (10/16)
- ・ハロウィンパーティー (10/31) ・音楽会 (11/28) ・クリスマス会 (12/18)
- ・卓球大会 (12/27) ・筆DEあそぼう！ (1/8) ・いっしょにあ・そ・ぼ (1/15)
- ・新春カルタ大会 (1/16)
- ・囲碁ランド (毎月2回) ・卓球ランド (毎月2回) ・おはなしの日 (毎月1回)
- ・たのしく歌おう (毎月1回) ・ぬりえコンクール (夏休み中)
- ・年賀状コンクール (冬休み中)

(自己評価)

昨年度から、休日になると開館から閉館まで一日中児童館で過ごすことの多い小学生が数名見受けられ、忙しい中でも親子の時間を楽しんでもらいたいという思いから、今年度は親子で参加するイベントを多く企画した。「ドッジボールで遊ぼう」ではお父さん達とドッジボールをしたり、「親子でエンジョイ」では、子ども達がルールを教えながら親子で本気でカードゲーム・ボードゲームを楽しんだ。子ども達がどんな様子で児童館で過ごしているのか、職員から児童館での様子を聞くのとはまた違い、一緒に過ごすことで感じられるものがあつたのではないかなと思う。

また、今年度もコロナ禍において可能な範囲、方法で季節行事やお祭りなどを開催することが出来た。制限の多い生活の中ではあるが、子ども達そして親子が少しでも楽しんで発散の出来る場を提供することが出来た。

(課題と対応)

親子参加型のイベント後は、親子で一緒に来館してくれることを期待していたが、保護者も忙しいのか、なかなか児童館で親子で過ごすことは少ない。また、各イベントを開催するにあたり、様々な親子の姿、子ども達の思いを目にした。親子で過ごすことより友達と遊ぶ楽しさに気付き始めている子どもの様子や、親子の時間に積極的にではない保護者の姿と反して親子の触れ合いを求めている子どもの姿など、子ども達、保護者、

それぞれの思いは多種多様であった。子ども達が楽しめるものだけではなく、保護者も積極的に参加したいと思ってもらえるようなイベントを企画し、「親子で楽しく遊ぶ時間」を児童館で過ごしてもらいたいと思っている。

今後子ども達、保護者それぞれの思いに耳を傾け、それぞれのニーズに沿った事業を展開していく。

⑦ 移動児童館

(4/5、6、5/24、7/26、29、8/6、11、12、19、20、24、26、1/7)

(自己評価)

新型コロナウイルスの対策を取りながら、カプラやリズム遊び、工作、ジャンボかるたなど様々な遊びを提供することが出来た。今年度は、コロナ禍でも移動児童館を再開することを周知してもらおうべく、各ひまわりクラブへの電話でのお知らせや会議内でのPRを行わせてもらった。その成果もあってか、各ひまわりクラブから依頼をいただき、「江南区内全ひまわりクラブで移動児童館を実施する」という施設目標は、新型コロナウイルス対策の観点から実施しないクラブ以外9か所で達成出来ている。

(課題と対応)

夏休みや小学校の代休日に各クラブからの依頼が殺到してしまう。来年度は、年度初めにあらかじめ混み合う時期をお知らせした上で、全ひまわりクラブに希望日と希望内容を記入できる用紙を配布する予定である。日程を調整し、年間スケジュールを立てることで、余裕を持って準備、活動が出来るようにしていきたい。

2 中学生・高校生等の年長児童の自主的な活動に対する支援

(自己評価)

中1男子、中3男子の数名が休日や早下校の日の放課後になるとほぼ毎週来館している。卓球部に所属する中1男子は、練習のため足繁く通ってくれている。中3男子は、部活を引退してから受験勉強の合間に来館するようになった。中学生たちは、小学生の遊びの相手をしてくれたり、職員の手伝いをしてくれたりと、子ども達にも職員にも頼られ、学校や家庭とは違う彼らの第三の居場所となっているように感じる。彼らの児童館を利用する目的は様々であるが、子ども達や職員との関わりの中で、人間関係や精神面、人間性など様々な面で成長を垣間見ることが出来ている。

(課題と対応)

勉強、部活、習い事等で日々忙しい中高生たちであるため、限られた時間の中で来館してくれた時には有意義に過ごせるよう、遊戯室の利用時間を優先するなど配慮していきたい。また、常に一人一人のことを気に掛け、それぞれの近況など他愛のない話を交えながら、「君のことを応援しているよ、いつでも児童館で待っているよ」という迎え入れ、受け止める雰囲気作りを行っていく。

① 遊戯室で遊ぼう (中学生)

(自己評価)

コロナ禍において部活動の制限があったり、大会が中止になってしまったりと、体力を持て余している中学生たち。発散させる場を求めているのが見受けられ、今年度から毎週日曜日午後5時～「中学生 遊戯室で遊ぼう」を実施している。卓球部男子がほぼ

毎週参加しており、1時間みっちりと集中して練習出来ることに魅力を感じているようである。8月頃までは、バレー好きの兄弟や他中学の女子も参加し、学年、学校、性別を超えてみんなで卓球やバレーを楽しむ姿もよく見受けられたが、9月以降、新型コロナウイルスの感染再拡大の影響か、参加者はかなり減少してしまった。

(課題と対応)

数名ではあるがこのイベントが定着しており、参加するメンバーがかなり固定化されている。来年度からは週替わりで優先的に行えるスポーツを決め、より平等に利用してもらえるようにしていきたい。また、今年度も小学6年生に向けて、「じどうかんだより4月号」にて「遊戯室で遊ぼう」のPRを行い、さらには中学校の部活ごとにPRを行うことで、多くの子ども達に利用してもらえるよう、中学生へのPRを強化していきたい。

3 子ども会等の地域組織活動の育成助長及び指導者の養成

① こども会議 (創作活動室)

(毎月第2土曜日9時15分～)

(自己評価)

4年生2名、5年生5名、6年生6名の計13名で一年間活動を行った。意欲のあるメンバーばかりで、一人一人が常に活躍の場を求めており、季節のイベントや大きなお祭り等で大活躍だった。月に1～2回程しか全員で顔を合わせないながらも、学年・性別を超えてチームワークは抜群であり、メンバー間の雰囲気も良い。一人一人が経験をかさねていく中で、イベント内容や企画などを自分たちで考え、臨機応変に対応が出来るため、イベントの進行をこどもクラブに任せられるほど頼もしい存在となっている。メリハリをつけて活動してくれ、職員と共にイベントを盛り上げてくれている。

今年度から、イベント時にこどもクラブのメンバーにも職員と同じ亀田東児童館の緑色のTシャツを着用してもらった。それにより、イベント参加者の目にこどもクラブの頑張りが目に留まりやすくなり、「お兄さん、お姉さんたちに優しくしてもらって楽しめました」「ありがとう」等の保護者からのこどもクラブへの激励や感謝の言葉や、低学年からの「自分も4年生になったらこどもクラブに入りたい!」という声が多く聞かれるようになった。それぞれがこどもクラブの自信に繋がっていると思っている。

(課題と対応)

リーダーとして頼もしくこどもクラブのメンバーを引っ張ってくれた6年生6名が卒業し、新たに4年生の新メンバー2名を迎えて再出発する来年度。既存の子ども達も一つずつ学年が上がるため、新しいメンバーを温かく迎え入れ、卒業する子達の背中を追って、さらなる成長をしてほしい。メンバーや雰囲気は今年度とは変わってしまうが、職員にはない視点とアイデアから、新しいメンバーからの新しい発信を楽しみにし、最大限発揮できるようサポートしていきたい。

4 子育て家庭の支援

① ひよこ広場（毎週水曜日10時30分～）

（自己評価）

昨年度までの常連であった親子が4月以降も多く参加してくれた。ひよこ広場を通して親子で仲良くなり、母親同士で情報交換をしながら、友達同士で仲良く遊ぶ子ども達を見守る姿が多く見られた。新規参加者がいた場合は、常連で顔なじみ同士の母親達の中で疎外感を感じないように、職員が間に入って仲を取り持ち、一人一人が楽しめるような雰囲気作りに努めた。ひよこ広場への参加をきっかけに、イベント以外の通常利用に繋がる親子も多くいた。

また、参加する親子は他の支援センター等にも足を運んでいるが、コロナ禍において混雑を避けたい親子にとっては、児童館の広さや程よい来館者数は安心材料になっていると感じている。

（課題と対応）

今年度まで常連として参加してくれていた子たちの大半が春から保育園・幼稚園に入園することが決まっている。来年度からは参加する子どもたちの年齢がガラリと変わることが考えられる。また新たな常連さんを作る努力をしていかなければならない。参加者の月齢や様子を見つつ、親子のニーズにしっかりと耳を傾けながら内容に柔軟性を持たせていきたい。

また、未就園児対象のイベントは平日の午前中に開催出来ているが、入園後の園児が参加出来るイベントが少ないのが現状である。土日の午前中に開催するイベントを増やし、園児親子にもより多く児童館を利用し、楽しんでもらいたいと考えている。そのため保育園等への「じどうかんだより」の配布先、配布数の見直しを行っている。

② 育児イベント（毎月1回）

（自己評価）

今年度は亀田地区公民館共催の家庭教育講演会としての企画を多く実施した。管理栄養士の方を講師に招いて「食育」に関するお話や、入園を考えている保護者に向けた「入園前の心得、園選び」に関するお話、親子で楽しく体を動かせる遊びなど、公民館の方に講師を紹介してもらうことで、あらゆる方面のニーズに対応するイベントを実施することが出来た。児童館として「こんなことをしてみたい」という希望があっても、講師の選任に苦慮し、なかなか開催まで辿り着けないことが多い現状があるため、この家庭教育講演会を通した亀田地区公民館との繋がりは有難く、心から感謝している。

また、今年度はBP講座を始めたことを受け、例年では少なかった乳児対象の育児イベントを企画した。「ベビーヨガ」「ベビーマッサージ」「ファーストシューズの選び方」など、BP講座終了後も引き続き児童館に足を運んでもらえるような内容を吟味した。

（課題と対応）

幼児親子だけでなく、乳児親子も児童館を利用出来ることを周知出来るように、BP講座の取り組みと乳児対象の育児イベントの連動は継続していく。BP講座、乳児対象の育児イベントを通じて、新たにひよこ広場や園児対象のイベントへの参加など、子ども達の成長に合わせて長く児童館を利用してもらえるような体制を整えていきたい。

さらに亀田地区公民館との連携を継続させ、来年度は児童館からも各公民館や地域と

繋がる事が出来るような発信が出来るとう良いと考えている。

③ B Pプログラム“赤ちゃんがきた！”親子の絆づくりプログラム

((1) 11/26、12/3、10、17 (2 代替講座) 3/11、3/25)

(自己評価)

B P講座は第一子の育児をする母親のための「仲間づくり・親子の絆づくり・少し先を見通した育児の知識の学習」を目的とするプログラムであり、亀田東児童館の初の試みとして今年度から開始した事業である。2~5か月の第一子と母親を対象に募集を行い、外部からファシリテーターを招き、1講座4回(1週間に1回)の企画で実施した。各回8組定員で親子が参加し、「赤ちゃんがいる生活」「子どものからだの発達と病気・事故防止」「子どもの心の発達」「親として生きる・家族を創る」のテーマに沿って、母親達が情報交換や意見交換を行い、とても有意義な時間となっていた。コロナ禍での初めての出産、育児と不安が多い中、同じ境遇の人と気持ちを分かり合える喜びを感じ、涙を流す場面もあった。それを温かく包み込むファシリテーターと仲間である母親達の存在はとても大きかったことと思う。また我が子だけでなく、他の赤ちゃんの様子を見る良い機会にもなっていたようである。母親達は毎回参加を楽しみにしてくれており、全講座終了後には、「そんなに頑張らなくてもいいんだ」と心が軽くなり、笑顔で帰って行く様子が印象的であった。母親達は、講座終了後にお互いの連絡先を交換するなど、親しくなっている様子も見られ、翌週に開催した育児イベントにも一緒に参加してくれていた。ここで得た仲間達・ファシリテーター・職員・児童館との出会いや学びを以って、豊かで楽しい育児に繋げていってほしい。

2月末~3月半ば開催予定だったプログラムは、新潟県のまん延防止等重点措置適用による休館により、中止となった。しかし、せっかく申し込みをしてくれた親子にコロナ禍でも他の親子との繋がりを持ってほしいと思い、3月に代替講座を企画した。今回のB P講座の参加者と前回のB P講座の参加者に直接声を掛け、母親達の育児の悩みや気になっていることを自由に話す「0~1歳児ママ集まれ♪おしゃべり会」を開催。それぞれ声を掛けると母親達はとても喜んでくれ、コロナ禍で孤独感や困難を抱えながら、親子が家族以外の人と繋がる機会を求めていることを改めて実感した。

(課題と対応)

参加希望が少なく、講座が成立しないことから中止となったことがあり、募集の際には区報に掲載していただいたり、江南区の股関節健診の際にPRをしていただくなど、江南区の行政の方々に多くの協力をいただいている。今後もなるべく多くの親子に参加してもらえよう、行政との連携を続けていきたいと考えている。また、今後さらに休館となっても、イベントを中止とするのではなく、代替講座やリモートでの配信など、提供方法を考えていきたい。

また、親子が安心して児童館のB P講座に参加してもらえるよう、新型コロナウイルスの感染対策や親子の様子、情報などのファシリテーターとの「報連相」も心掛けていきたい。講座終了後も児童館を利用したいと思ってもらえるような雰囲気作りや児童館の紹介も重要だと思っている。さらに、講座参加者以外に来館した利用者にも不便や迷惑を感じさせないよう、環境設定の配慮をしていきたい。

5 その他地域の児童の健全育成に必要な活動

今年度の亀田東児童館運営協議会は、第23回を6月28日(月)に開催し、亀田東小学校長をはじめ、亀田中学校長、主任児童委員、亀田中学校地域教育コーディネーター、亀田東小学校区コミュニティ協議会代表、江南区社会福祉協議会、指導保育士、保護司、学識経験者の方々を委員とし、委員9名で行った。令和2年度の収支報告、令和3年2月～5月までの利用者推移と活動報告、今年度の活動予定について報告し、委員の方々からご意見を頂いた。今年度から、亀田東小学校区コミュニティ協議会会長の交代により、新たな会長の方が代表という形で運営委員に加わり、亀田中学校地域教育コーディネーターとして長年地域と亀田東児童館を支えてきてくれた方が運営委員会会長となることと決定し、児童館へのさらなる協力と発展が期待出来るようである。

第24回は2月21日(月)に予定していたが、新型コロナウイルスの感染再拡大による新潟県のまん延防止等重点措置の適用にあたり、開催を中止とし、配布予定であった書面を各委員に郵送で配布した。また、今年度いっぱいでの他現場への異動、退職が決定している職員がおり、長年児童館を支え、運営協議委員の方々に大変お世話になっていたため、書面にて挨拶に代えさせていただいた。

今後も地域で必要とされる児童館となれるよう、運営協議委員の方々と協力・連携を取り合い、児童館の存在意義を高めていきたい。

総括・評価

今年度もコロナ禍において休館やイベントの中止を余儀なくされた。その中でも感染対策を行いながら、出来ることから一つずつ利用者を楽しんでもらえるようなイベントを提供し、コロナ禍でも安心して利用し、居場所となれる児童館作りを行うことが出来た。

幼児親子、小中学生それぞれが多く来館し、幼児親子、小中学生がお互いに顔なじみになっている。小学生が幼児親子対象のイベントのお手伝いをしてくれたり、自然と絵本の読み聞かせをしてきている場面も多く見られた。また、小学校高学年や中学生が年下の子達を遊びの中で引っ張ってくれており、遊びの幅が広がっている。普段、児童館で様々な子と関わっているおかげか、初対面の他校区の子や他学年の子達とも抵抗なくすぐに仲良くなって遊んでいる姿が見られる。学校や学年、年齢、性別を超えて遊び、関わる楽しさを感じてもらえ、その中で一人一人が成長出来ていることが嬉しく、この異年齢交流こそが亀田東児童館の最大の強みだと感じている。

新型コロナウイルスの影響による休館が相次いでおり、今後さらなる感染の拡大が考えられ、イベントの開催や児童館運営の在り方に課題が多くある。人々の意識、生活様式の変化による利用者の減少は止められない一面があるが、児童館の私たちが出来ることは何か、利用者に提供出来るものはないか、職員一人一人が見つめ直し、新たな児童館の存在意義を見出していきたくと考えている。また、今後もしさらに児童館が休館となったとしても、地域活動、親子の生活は止まらず動き続ける。そのため、児童館の機能を全て止めるのではなく、地域の親子に楽しんでもらえること、出来ることはないか、リモート事業や工作キットの配布など、児童館として出来ることを考え続けていきたい。

今年度一年を通して見えてきたことから、児童館として掲げる来年度の大きな目標は「地域に目を向けること」。今までは児童館の館内だけで事業や活動が完結していたが、今後はより地域から必要とされる児童館、地域と共にある児童館となることを目指して、より地域との結び付きを大切にしていきたいと考えている。地域の方と出来る新たなイベントの企画や地域の行事に児童館として出向いたり、移動児童館の開催場所を各地区の公民館に広げるなど、新たな地域との結び付きを生み出していけると良い。

コロナ禍で出来ることは限られるが、地域の子ども達、親子に最善のものを提供できるよう、感染対策をしっかりと行いながらも明るく前向きに児童館運営を行っていききたい。